

スマートフォンの功罪

荒井 正行

自宅から金町駅までの通勤の間、乗客を見渡すと必ず右手（あるいは左手）にスマートフォンをもち、指を一生懸命に動かしている。この行動は世代によらないようである。私は皆さんも知っての通りスマートフォン、携帯電話の類を持っていない。このため片道1時間40分の通勤時間の全てを読書や勉強に充てている。

数年前までは、電車の車内でスマートフォンを片手に時間をつぶしている人はほとんど見かけなかった。今は、車内のみならず歩きながら正面を見ずにスマートフォンの画面を見ている。この動物的現象を介して何を考えたらよいであろうか。

数十年前の通信手段は自宅に、あるいは職場にある固定電話であった。我々の世代は長電話を慎むよう躰けられているので、電話の使用時間は大体3分程度である。このため、短い時間に適切に自分の伝えたいことを頭の中で予め整理してから電話した。さらに詳しく何かを伝えたいときは手紙を書くのである。何度も手紙を書いては読み返し、相手がちゃんとこちらの伝えたいことが理解できるか、確認する必要がある。その後、パソコンが普及するようになった。ワードプロセッサが開発された。手書きの手紙はワードプロセッサによる機械的な文字に置き換えられた。これまでは、何度も何度も手紙や書類を書き直していた。しかし、ワードプロセッサが出現することで削除ボタンを押すだけで文章を容易に書き直しできるようになった。さらに通信手段が発達し、パソコン同士の通信が交わせるようになった。開発された当初の通信内容は仕事に関するものが中心であり、自分のパソコンから大型計算機に侵入し、プログラムを流し込んで数値解析をやっていたのである。通信手段はさらに進化してメールを相手に対して簡単に送れるようになった。私などは、昔の手紙の書き方の癖が抜けきれず、「背景～」から文章をはじめてしまう。最近の学生や社会人から受ける取るメールの書き出しは、ほとんどが「お疲れ様です。」とか「ご苦労様です。」という意味不明な口語調にはじまり、書かれている文章もおしゃべり言葉で終始している。

パソコンと性能がほとんど同レベルに達したスマートフォン。昔で言うならば、机の上に置いていたパソコンが小さくなり、ポケットに入れられるようになった。パソコンは自宅や職場にあったため、パソコンを使用する時にはわざわざパソコンがある部屋に行かなければならなかった。しかし、今やポケットに入れ

て外にパソコンを連れ出すことができる。社会の豊かさと利便性の観点からはこれで良いのであるが、私に言わせれば、部屋の外と中とを区別できなくなった人種が非常に増えたと思えてならない。便利にはなったが、人間としての、あるいは大人としてのモラル、躰けが崩壊したといえよう。

手軽にスマートフォンを介してメールを送ることができるようになった。このために、先にも述べたように口語調の意味不明な文章を書くという訓練が強制的に始められたと思っている。これをスマートフォンでメールを送っている人種は、一日 X 回、一年 365×X 回繰返し行っているであるから、何が本当の文章なの分からなくなるのも当然であろう。皆さんには耳の痛い話と思われるが、最近文章力と思考力が極端に低下したのはスマートフォンの存在に一因があると思っている。そして、「スマートフォンに操られたパンツをはくサル」が増加の一途を辿っている。教育の一翼を担っていると考えている私には、どうやってこの流れを変えたらよいのかわからない。

私が皆さんに伝えたいことは概ね理解してもらえたと思う。一度、スマートフォンから離れてみてはどうだろうか？そうすると一日を有効に、充実して送ることができる。スマートフォンの画面を見ていた時間と同等な時間を読書に充ててみると良い。ワードでもよいから、自分の書いた文章を客観的に見てみると良い。さらに他人から注入される余計な情報を断ち切ることで自分自身を見つめ直してみると良い。

以上が、最近私が社会に対して感じていることである。